スンナ派伝承主義者にとってのアリー崇敬
―ニーシャープールのハーキム（1014 年没）が「シーア派的」と批判された理由と文脈―

The Veneration of ʿAlī among the Sunni Traditionalists: Cause and Context to Criticize al-Ḥākim al-Naysābūrī (d.1014) as *Shīʿī*

森山　央朗
Teruaki MORIYAMA

Several Sunni Hadith scholars criticized al-Ḥākim Abū ʿAbd Allāh al-Naysābūrī（d. 1014）, prominent Shāfiʿī Hadith scholar praised as *Imām Aṣḥāb al-Ḥadīth*（Great Teacher of the Companions of the Tradition）, as *Shīʿī*（Shiitic）because of his claim that “Hadith of Ghadīr” and “Hadith of Bird” are *ṣaḥīḥ*（authentic）. Those two Hadiths affirm the distinguished position of ʿAlī b. Abī Ṭālib（d. 661）. This paper analyzes articles by the Sunni Hadith scholars or traditionalists referring to themselves as *Aṣḥāb al-Ḥadīth* about the criticism from the eleventh to the fourteenth century. The analysis reveals causes of the criticism and context of related narratives and then explains how Sunni traditionalists’ views on the veneration of ʿAlī were constructed in tension with the Sunni creed and rivalry between Shāfiʿīs and Ḥanbalīs among *Aṣḥāb al-Ḥadīth*. Furthermore, it implies that their changing recognition of the veneration of ʿAlī represented their changing perceptions of the boundary between Shiites and Sunnis.

はじめに

本稿が取り上げるハーキム（al-Ḥākim Abū ʿAbd Allāh Muḥammad b. Bayyiʿ al-Naysābūrī，1014 年没）は，933 年にホラーサーン（イラン北東部）の中心都市であったニーシャープールに生まれ，10 世紀後半から 11 世紀前半にかけて同市を中心に活躍したウラマーである。「ハーキム」（判事）という通称は，彼が裁判官を務めたことによる。しかし，彼が顕著な業績を残したの

* 本稿は日本学術振興会科学研究費 19H01317 の助成による研究成果の一部である。

は，ハディース学（ʿulūm al-ḥadīth）の分野においてである[1]。

ハディースは，預言者ムハンマド（632 年没）の様々な言行を語る無数の伝承である。個々のハディースは，それぞれが語る預言者の言行を見聞きした教友たちから語り伝えられたとされるが，その真正性は常に議論の的となってきた。なぜなら，7 世紀後半の内乱（656～61 年）以来，イスラーム教徒たちは複数の党派に分かたれ，それらの党派が，自派の正統性と敵対者への非難を預言者の言行に根拠づけようとしたことなどから，多くのハディースが捏造されたからである。そのため，ハディースを扱うウラマーたちにとって，個々のハディースの真正性を検証し，預言者の言行を正しく伝えると見なされるハディースを選別することと，その選別の妥当性を論証することが重要な課題となった。預言者のスンナ（慣行）を伝えるハディースに従うことを強調したシャーフィイー（Muḥammad b. Idrīs al-Shāfiʿī，820 年没）やイブン・ハンバル（Aḥmad b. Ḥanbal，855 年没）の伝承主義的法学思想を支持したウラマーたちは，「ハディースの徒」（Aṣḥāb/Ahl al-Ḥadīth）と名乗り，ハディースの真正性をいかに判定・証明するかを中心に，ハディースをめぐる知識体系であるハディース学を発展させ[2]，スンナ派の確立に貢献した。

そのなかでハーキムは，9 世紀後半にブハーリー（Muḥammad b. Ismāʿīl al-Bukhārī，870 年没）とムスリム（Muslim b. al-Ḥajjāj，875 年没）がそれぞれに編纂し，ともに『正伝集』（*al-Ṣaḥīḥ*）という名で知られる 2 篇のハディース集を研究し，正伝（ṣaḥīḥ）と認められる真正性の高いハディースが備えるべき条件を理論化して，『正伝入門』（*al-Madkhal ilā al-Ṣaḥīḥ*）や『ハディース学の知識』（*Maʿrifat ʿulūm al-ḥadīth*）を著した。また，正伝に分類されるべき条件を備えると判断したものの，ブハーリーとムスリムの『正伝集』に収録されていないハディースを集めて，『両正伝集補遺』（*al-Mustadrak ʿalā al-*

---

[1] James Robson, “al-Ḥākim al-Naysābūrī,” in The *Encyclopaedia of Islam, New Edition*, H. A. R. Gibb et al.（eds.）, 13 vols., Leiden: Brill, 1960−2009, 3: 82.

[2]「ハディースの徒」は，一般に，ハンバル派を支持した急進的伝承主義者の党派と見なされてきた。しかし，シャーフィイー派のハディース学者なども「ハディースの徒」を名乗っており，単一の思想に基づく輪郭のはっきりした党派というより，師弟関係でつながるハディース学者の複数の学統のゆるやかな集合と見なした方が適当である。Moriyama Teruaki, “Using Hadiths in the Appropriate Style: Scholarly Practice of the Shāfiʿī Aṣḥāb al-Ḥadīth,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies*（*AJAMES*）36-2（2021）: 7−12.

Ṣaḥīḥayn）を編纂した。これらの業績によって，ハーキムは，後代のスンナ派ウラマーから「ハディースの徒の大師」（imām ahl al-ḥadīth）[3] と讃えられた。

しかしその一方で，ハーキムは「シーア派的」（mutashayyiʿ/shīʿī）であったと，一部のスンナ派ハディース学者たちから繰り返し批判された。その理由は，ハーキムが『両正伝集補遺』に「ガディール[4] のハディース」（Ḥadīth Ghadīr）と「鳥のハディース」（Ḥadīth al-Ṭayr/Ṭāʾir）を収録したことである[5]。この二つのハディースは，アリー（661 年没）に特別な地位を認めるものとして，確かにシーア派が重視してきた。とはいえ，ハーキムの学統からは，彼がシャーフィイー派法学を支持する「ハディースの徒」であったことは明らかである[6]。14 世紀のカイロで活躍したシャーフィイー派ウラマーで，同派の人名録を編纂したスブキー（Tāj al-Dīn Abū Naṣr ʿAbd al-Wahhāb b. ʿAlī al-Subkī，1370 年没）は，ハーキムを「偉大な大師にして勤勉な［ハディース］[7] の碩学（ḥāfiẓ）」と評し[8]，多くの紙幅を割いてハーキムはスンナ派であったと論じた[9]。

現代の研究においては，両『正伝集』の正典化を論じるなかでハーキムを大きく取り上げたブラウン（Jonathan Brown）が，彼に対する「シーア派的」との批判は事実無根であり，上記二つのハディースを正伝としたことが，「ハディースの徒」の反シーア派感情を刺激したのではないかと述べる[10]。また，『両正伝集補遺』の「教友たちに関する知識の書」（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba）を分析したルーカス（Scott C. Lucas）は，上記二つのハディースのような親

---

[3] Ibn Khallikān, *Wafayāt al-aʿyān wa-anbāʾ abnāʾ al-zamān*, Iḥsān ʿAbbās（ed.）, 8 vols., Beirut: Dār al-Thaqāfa, n.d., 4: 280（#615）.

[4] ガディール・フンム（Ghadīr Khumm）。メッカとメディナの間にある水場の名前。預言者ムハンマドは，「別離の巡礼」からメディナに戻る途中にここで立ち止まり，同行した信徒たちに説教したと伝えられる。

[5] ハーキムは，ウマイヤ朝初代カリフのムアーウィヤ（在位 661～80 年）に対して否定的であったことでも「シーア派的」と批判されたと伝わる。Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam fī taʾrīkh al-mulūk wa-l-umam*, Muḥammad ʿAbd al-Qādir ʿAṭā and Muṣṭafā ʿAbd al-Qādir ʿAṭā（eds.）, 18 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 2012, 15: 110（#3059）.

[6] Moriyama, “Using Hadiths in the Appropriate Style,” 9−10.

[7] 引用文中の［　］内は筆者による補足。以下同様。

[8] Al-Subukī, *Ṭabaqāt al-Shāfiʿiyya al-kubrā*, Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī and ʿAbd al-Fattāḥ Muḥammad al-Ḥulw（eds.）, 10 vols., Cairo: Dār Iḥyāʾ al-Kutub al-ʿArabiyya, 1964−73, 4: 156（#328）.

[9] Ibid., 4: 161−171（#328）.

[10] Jonathan Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim: The Formation and Function of the Sunnī Ḥadīth Canon*, Leiden and Boston, 2007, 158−160.

アリー的なハディースとともに，内乱においてアリーと敵対し，シーア派に呪詛された教友たちを賞賛するハディースも収録されていることを指摘する。そして，こうしたハーキムのハディースの選定は，スンナ派の核心的教理である「教友の集合的誠実」(the collective probity of the Companions)，すなわち，内乱の経緯は別として，教友世代を総体として誠実な信仰者と見なす理念の柔軟性を表すと結論づけた[11]。これに対して，ハーキムの主著の一篇である『ニーシャープール史』(*Ta'rīkh Naysābūr*）のペルシア語訳を校訂し，その序文でハーキムが属した宗派・学派を検討したシャフィーイー・カドカニー（Muḥammad-Riḍā Shafīʿī Kadkanī）は，ハーキムが件の二つのハディースを正伝としたことをあげて，彼が外面でシャーフィイー派を装いつつ内面でシーア派であった可能性を示唆した。しかし，そのように断定したわけではなく，シャーフィイー派の大多数がアリーと預言者一族（ahl-i bayt-i Rasūl）に特別な敬意を抱いていたとも述べた[12]。つまり，アリーに対する崇敬を表しただけでシーア派と断じることはできないということである。現在確認できる史料記述に則ると，ハーキムはシャーフィイー派「ハディースの徒」の一員であり，ハディースの研究をとおしてスンナ派の確立に寄与したと考えるのが妥当である。

それではなぜ，ハーキムは「シーア派的」だとの批判が，スンナ派ハディース学者たちによって繰り返し取り沙汰されたのであろうか。本稿では，ハーキムを「シーア派的」と批判することに関して，11 世紀から 14 世紀のスンナ派ハディース学者たちが残した記述を分析し，批判の理由と批判をめぐって展開した議論の文脈を整理する。その作業をとおして，スンナ派の確立に貢献した「ハディースの徒」が，アリー崇敬をどのように認識していたのかを考察する。

---

[11] Scott C. Lucas, “Al-Ḥākim al-Naysābūrī and the Companions of the Prophet: An Original Sunnī Voice in the Shīʿī Century,” in Maurice A. Pomerantz and Aram A. Shahin（eds.）, *The Heritage of Arabo-Islamic Learning: Studies Presented to Wadad Kadi*, Leiden and Boston: Brill, 2016, 236−249.

[12] Ḥākim Nīshābūrī, *Tārīkh-i Nīshābūr*, Muḥammad b. Ḥusayn Khalīfa-yi Nīshābūrī（trans. into Persian）, Muḥammad-Riḍā Shafīʿī Kadkanī（ed.）, Tehran: Āgah, 1996, 36−37.

I. ハーキムに対する「シーア派的」との批判をめぐる言説の展開

先述のとおり，ハーキムに「シーア派的」との批判が寄せられることになった原因は，『両正伝集補遺』に「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を正伝として収録したことである。まず，「ガディールのハディース」に関する『両正伝集補遺』の記事を訳出すると以下のようになる。

〔アブー・フサイン・ムハンマド・ブン・アフマド・ブン・タミーム・ハンザリーがバグダードで我々［ハーキム］に伝えた。［中略］アブドゥッラー・ブン・アフマド・イブン・ハンバルが「私の父［イブン・ハンバル］が私に伝えた」と伝え，［中略］ザイド・ブン・アルカムが言った。〕[13]

神の使徒［預言者ムハンマド］が別離の巡礼から戻り，ガディール・フンムに着いたとき，［同行の信徒たちに］ある木立に［集まるように］命じた。［中略］そして神の使徒は言った。「力強く偉大な神が私の保護者（mawlā）であり，私は全ての信仰者（muʾmin）の保護者である」。そして，アリーの手を取って言った。「私を保護者とした者は，この者［アリー］がその者の庇護者（walī）である。神よ，彼［アリー］を保護者とする者を保護し，彼を敵とする者を敵とし給え」。

以上がこのハディースの全体である。これは，両師（al-shaykhayn，ブハーリーとムスリム）の条件に則って正伝なハディースであるが，両師はこの全体を［両『正伝集』に］収録しなかった。これと類似する（shāhid）のは，サラマ・ブン・クハイルがアブー・トゥファイルから伝えたハディースであり，それもまた両師の条件に則って正伝である。[14]

「ガディールのハディース」の眼目は，「私を保護者とした者は，この者［アリー］がその者の庇護者である」という預言者の言葉である。この言葉は，預言者がアリーに，全てのイスラーム教徒に対する指導権を直々に託し

[13] 引用文中の〔　〕内はイスナード（isnād，典拠，伝承経路）。以下同様。

[14] Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *al-Mustadrak ʿalā al-Ṣaḥīḥayn wa-bi-dhaylihi al-Talkhīṣ li-l-Ḥāfiẓ al-Dhahabī*, Yūsuf ʿAbd al-Raḥmān al-Marʿashlī (ed.), 5 vols., Beirut: Dār al-Maʿrifa, 1986, 3: 109（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, wa-min manāqib Amīr al-Muʾminīn ʿAlī b. Abī Ṭālib）.

たことを示すからである。上掲のハディースに加えて，ハーキムは,「私を保護者とした者は，アリーがその者の保護者である」といった同趣旨の預言者の言葉を伝えるハディースを四つ『両正伝集補遺』に収録した[15]。

他方,「鳥のハディース」に関する記事は，以下のとおりである。

〔碩学アブー・アリーが，私［ハーキム］に伝えた。［中略］アナス・ブン・マーリクが伝えて言った。〕

私［アナス］が神の使徒に仕えていると，焼いた若鳥が神の使徒に出された。すると，神の使徒が言った。「神よ，あなたの被造物の中であなたにとって最も好ましい者を，私のところに来させ給え。その者が私とともにこの鳥を食べる」。私は言った。「神よ，アンサールの一人をその［最も好ましい］者とし給え」。するとアリーが来た。私は［アリーを入室させないように］神の使徒は所用中だと言った。その後［また］アリーが来た。私は神の使徒は所用中だと言った。その後［また］アリーが来た。神の使徒が言った。「［扉を］開けろ」。アリーが入室すると，神の使徒が言った。「何で入ってこなかったのか」。アリーは言った。「アナスが，あなたは所用中だと言い張って私を帰そうとしたのは，これで 3 回目だ」。神の使徒は言った。「何でそんなことをしたのだ」。私は言った。「神の使徒よ，あなたの祈願を聞いて，自分の集団（qawm）の一人［が神に最も好まれた者］であることを願ったのだ」。神の使徒は言った。「人は時に自分の集団を愛するものだ」。

これは，両師の条件に則って正伝なハディースであるが，両師は［両『正伝集』に］収録していない。[16]

さて，上記二つのハディースを正伝として『両正伝集補遺』に収録したことで，ハーキムが「シーア派的」と批判されたことについて，現在確認でき

[15] Ibid., 2: 130（Kitāb qasm al-fayʾ）, 3: 110, 134（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, wa-min manāqib Amīr al-Muʾminīn ʿAlī b. Abī Ṭālib）, 371（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, dhikr manāqib Ṭalḥa b. ʿUbayd Allāh al-Taymī）.

[16] ハーキムはこのハディースに続けて，同様の趣旨で文言の異なるハディースをもう一つ収録している。Ibid., 3: 130−132（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, wa-min manāqib Amīr al-Muʾminīn ʿAlī b. Abī Ṭālib）.

る最も古い記述は，11 世紀後半にバグダードで活躍したハティーブ（al-Khaṭīb Abū Bakr Aḥmad b. ʿAlī al-Baghdādī，1071 年没）が，『バグダード史』に収録したハーキムの伝記記事の以下の一節である。ハティーブは，彼の師のアブー・ヌアイム（Abū Nuʿaym Aḥmad b. ʿAbd Allāh al-Aṣbahānī，1038 年没）をとおしてハーキムの学統につながるシャーフィイー派「ハディースの徒」であり，スンナ派ハディース学の発展に大きく貢献した[17]。

> イブン・バイイウ［ハーキム］は，シーア派（al-tashayyuʿ）に傾いていた。
>
> 〔誠実，有徳で学識ある師であったアブー・イスハーク・イブラーヒーム・ブン・ムハンマド・アルマウィーがニーシャープールで私［ハティーブ］に伝えて言った。〕
>
> 碩学ハーキム・アブー・アブドゥッラーは，ブハーリーとムスリムが両『正伝集』においてハディースを選別する際に従った条件に則って正伝と思ったハディースを集めた。その中に，「鳥のハディース」と「私を保護者とした者は，アリーがその者の保護者である」というハディースが含まれる。ハディースの徒は，このことのためにハーキムを批判し，このことについて彼の言うことを無視し，このことについて彼の行うことに同意しなかった。[18]

ハティーブからおおよそ 1 世紀の後，中央アジア西部の都市，マルウで活躍したハディース学者であったサムアーニー（Abū Saʿd ʿAbd al-Karīm al-Samʿānī，1166 年没）も，ハーキムには「シーア派性」（tashayyuʿ）があったと指摘し，ハティーブの上掲の記事を引用した[19]。サムアーニーは，ハティーブと同様にハーキムの学統に連なるシャーフィイー派「ハディースの徒」の一人であった[20]。

---

[17] 森山央朗「ウラマーの出現とイスラーム諸学の成立」大黒俊二・林佳世子（責任編集）『西アジアとヨーロッパの形成：8～10 世紀』岩波講座世界歴史 8，岩波書店，2022, 125−127.

[18] Al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Taʾrīkh Baghdād aw Madīnat al-Salām*, Muṣṭafā ʿAbd al-Qādir ʿAṭā（ed.）, 14 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1997, 3: 94（#1096）.

[19] Al-Samʿānī, *al-Ansāb*, Muḥammad ʿAbd al-Qādir ʿAṭā（ed.）, 6 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1998, 1: 455（#1572）.

[20] Al-Dhahabī, *Siyar aʿlām al-nubalāʾ*, Shuʿayb al-Arnaʾūṭ et al.（eds.）, 25 vols., Beirut: Muʾassasat al-Risā-

ハティーブとサムアーニーのこうした記述から，11 世紀から 12 世紀のシャーフィイー派「ハディースの徒」の間で，ハーキムが「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を正伝と判定したことが問題視され，その判定はハーキムの「シーア派性」の故だと批判されたことが確認される。この批判はその後も続けられ，シャーフィイー派「ハディースの徒」のなかに留まるものでもなかった。

サムアーニーより少し後の時代に，バグダードで説教師（wāʿiẓ）として活躍し，ハンバル派を支持するハディース学者であったイブン・ジャウズィー（Abū l-Faraj ʿAbd al-Raḥmān b. al-Jawzī，1201 年没）は，自著の『整えられたもの』に収めたハーキムの伝記記事において，上掲のハティーブの記事を引用し，それに続けて以下の記述を加えた。

〔ムハンマド・ブン・ナースィルが我々に伝え，彼には碩学ムハンマド・ブン・ターヒル・マクディスィーが伝えて言った。〕

アブー・アブドゥッラー・ハーキムは，「鳥のハディース」は正伝であるのに，『正伝集』に選録されていないと言った。イブン・ターヒルは言った。［このハディースは］創作されたハディース（ḥadīth mawḍūʿ）であり，アナスなどから有名な者や無名な者を経て，クーファの民の堕落した者たち（suqqāṭ ahl al-Kūfa）[21] から伝えられているに過ぎない。イブン・ターヒルは言った。ハーキムは，［次の］二つのいずれかである。もし，彼が「正伝」［がいかなるものか］を知らなかったのなら，彼の言うことには頼れない。もし，「正伝」［がいかなるものか］を知っていて，それと異なることを言ったのなら，彼は手に負えない嘘つきである。[22]

イブン・ジャウズィーによるこの記述は，先のハティーブの記述と比べて，批判の調子が強くなっていることに注意を引かれる。また，もう一つ注意を引かれる点は，「ガディールのハディース」への言及がなく，批判の矛

la, 1982−88, 20: 456−465（#292）; Moriyama, “Using Hadiths in the Appropriate Style,” 10.

[21] シーア派を指すと思われる。

[22] Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam*, 15: 109−110（#3059）.

先が「鳥のハディース」を正伝としたことに集中されていることである[23]。この2点の背景や文脈については次節で論ずる。

以上のように，ハーキムに対する批判が続けられてきたことを受けて，14世紀前半のダマスカスで活躍したハディース学者で，ハーキムやハティーブを含むシャーフィイー派「ハディースの徒」の学統を継承したザハビー（Shams al-Dīn Abū ʿAbd Allāh Muḥammad b. ʿUthmān al-Dhahabī，1348年没）は[24]，ハーキムは「信頼できる大師」（imām ṣadūq）であるが，真正性の低いハディースを正伝としたことで，「シーイー」（shīʿī）な人物と知られるようになったと述べる。そして，次のように続けてハーキムを弁護した。なお，「シーイー」という言葉は，一般に「シーア派の（人）」「シーア派的な」と訳されるが，以下にその含意を検討するので，ここではあえて「シーイー」としておく。

> イブン・ターヒルは言った。「私は，アブー・イスマーイール・アブドゥッラー・アンサーリーに，ハーキム・アブー・アブドゥッラーについて尋ねた。すると彼は言った。『［ハーキムは］ハディースにおいては大師であるが，悪辣なラーフィディー（rāfiḍī）である』と」。
>
> 私［ザハビー］は言う。「神は公正を好む。この男［ハーキム］はラーフィディーではなく，シーイーなだけだ」と。[25]

この「シーイー」と「ラーフィディー」という言葉について，15世紀前半のカイロで活躍した著名なシャーフィイー派ハディース学者であるアスカラーニー（Shihāb al-Dīn Abū l-Faḍl Aḥmad b. Ḥajar al-ʿAsqalānī，1449年没）は，次のように述べた。

---

[23] ちなみに，イブン・ジャウズィーを母方の祖父とし，ダマスカスで説教師として活躍したスィブト・イブン・ジャウズィー（Shams al-Dīn Abū l-Muẓaffar Yūsuf Sibṭ b. al-Jawzī, 1256年没）も，ハーキムは「鳥のハディース」を正伝としたことで「シーア派的」と批判されたと述べる一方で，「ガディールのハディース」には言及していない。Sibṭ ibn al-Jawzī, *Tadhkirat al-khawāṣṣ min al-umma bi-dhikr khaṣāʾiṣ al-aʾimma*, Ḥusayn Taqī-zāda（ed.）, 2 vols., Qom: Markaz al-Ṭibāʿa wa-l-Nashr li-l-Majmaʿ al-ʿĀlamī li-Ahl al-Bayt, 2005−06, 1: 294.

[24] 森山央朗「『ハディースの徒』にとっての旅」『歴史学研究』1012 (2021): 18.

[25] Al-Dhahabī, *Mīzān al-iʿtidāl fī naqd al-rijāl*, ʿAlī Muḥammad al-Bijāwī（ed.）, 4 vols., Beirut: Dār al-Maʿrifa, n.d., 3: 608（#7804）; idem., *Siyar aʿlām al-nubalāʾ*, 17: 174（#100）.

シーイーであることは，アリーを愛し，アリーを教友たちの前に立てることである。一方，アリーをアブー・バクルとウマルよりも先に立てる［優位に置く］者（man qaddamahu ʿalā Abī Bakr wa-ʿUmar）は，極端な党派主義者であり，ラーフィディーと呼ばれる。[26]

ここで言われる「シーイー」とは，「シーア・アリー」（shīʿat ʿAlī，アリーの党派）に由来し，「［アリーの］党派的」な人物，すなわちアリー支持者を意味する。言うまでもなくシーア派信徒の自称でもある。一方，反シーア派の立場を取るイスラーム教徒たちは，シーア派信徒たちを，アリーに先立ってカリフとなったアブー・バクル（在位 632～34 年）やウマル（在位 634～44 年）を拒否（rafaḍa）した者たちと非難し，「ラーフィディー」（rāfiḍī 拒否者）と呼ぶことがあった[27]。アスカラーニーは，上掲の記事において，この「ラーフィディー」（拒否者）という言葉で，アリーをアブー・バクルやウマルに優越する最も正統な指導者とするシーア派信徒を指し，アリーを熱心に支持して「党派的」（シーイー）であることと分けたのである。

アスカラーニーは，ザハビーよりも約 1 世紀後に生きた人であるが，彼の定義に沿ってザハビーによるハーキムの弁護を読むと，その主張を無理なく理解できる。すなわち，ハーキムは，アリーを愛するあまり，アリーの特別な地位を語るハディースを，真正性に問題があっても正伝とするほど「シーイー」（党派的）であったが，アブー・バクルやウマルを拒否しなかったので，「ラーフィディー」（拒否者）と呼ばれるシーア派信徒ではなかったという主張である。

確かにハーキムは，アブー・バクルやウマルを拒否したことはなく，アリーをアブー・バクルやウマルよりも上位に置いたこともない。『両正伝集補遺』の「教友たちの知識の書」においても，アリーの美質を語るハディースを列挙する前に，アリーに先立ってカリフとなった，アブー・バクル，ウマル，ウスマーン（在位 644～56 年）の美質を語るハディースを並べる[28]。

---

[26] Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Hadā al-sārī muqaddimat Fatḥ al-Bārī*, Muḥibb al-Dīn al-Khaṭīb（ed.）, n.p.: al-Maktaba al-Salafiyya, n.d., 459.

[27] 清水和裕「アッバース朝期バグダードにおける教友呪詛」『西南アジア研究』77 (2012): 20.

[28] Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *al-Mustadrak ʿalā al-Ṣaḥīḥayn*, 3: 61−80（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, Abū Bakr b. Abī Quḥāfa）, 80−95（Wa-min manāqib Amīr al-Muʾminīn ʿUmar b. al-Khaṭṭāb）, 95−107（Faḍāʾil Amīr

また，ルーカスが指摘したとおり，シーア派が呪詛した教友たちを讃えるハディースも収録している[29]。

周知のとおり，スンナ派は，ウンマの指導権に預言者に次いでふさわしい正統なカリフは，アブー・バクル，ウマル，ウスマーン，アリー（在位656～61年）の順であったと説く。そのため，アリー支持はスンナ派とシーア派に共通し，両派を分けるのは，アブー・バクルやウマルの指導権は正統であり，アリーのそれに優先したことを認めるか否かであることもつとに指摘されてきた。「［アリーの］党派的」であることと，「拒否者＝シーア派信徒」であることを分けてハーキムを弁護したザハビーの主張は，スンナ派の基本的教理に沿ったものと言える。

そのザハビーの弟子が，ハーキムのシーア派疑惑の否定に熱心だったスブキーである[30]。スブキーは，ハーキムが一人の教友も非難していないのに，「アリーを先に立てること」（taqdīm ʿAlī）を画策したと批判されたと述べ[31]，様々な方面からハーキムがスンナ派であることを論証しようとした。そのなかで，「鳥のハディース」を大きく取り上げ，師のザハビーの見解を引きつつ，『両正伝集補遺』に収録された「鳥のハディース」のイスナードの信頼性を擁護し，ハーキムは，捏造と知りつつ「鳥のハディース」を正伝としたわけではないと述べた[32]。そして，ハーキムに，必要以上にアリーに傾倒する所があったとしても，アブー・バクル，ウマル，ウスマーンを非難したことはなく，アリーをアブー・バクルやウマルより優位に置いたこともないと繰り返した[33]。

スブキーは，アスカラーニーの師であるので[34]，アスカラーニーはザハビー

---

al-Muʾminīn Dhī al-Nūrayn ʿUthmān b. ʿAffān）.

[29] 例えば，「ラクダの戦」（656年）でアリーと戦って戦死した，タルハ（Abū Muḥammad Ṭalḥa b. ʿUbayd Allāh）とズバイル（Abū ʿAbd Allāh Zubayr b. al-ʿAwwām Ḥawārī Rasūl Allāh）の美徳（manāqib）に関するハディース・伝承を収録する。しかし，ムアーウィヤの美徳に関する記述はない。Ibid., 3: 359−368（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, dhikr manāqib Ḥawārī al-Rasūl）, 368−374（Dhikr manāqib Ṭalḥa b. ʿUbayd Allāh al-Taymī）.

[30] Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *al-Durar al-kāmina fī aʿyān al-miʾa al-thāmina*, 4 vols., Beirut: Dār Iḥyāʾ al-Turāth al-ʿArabī, n.d., 2: 426（#2547）.

[31] Al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfiʿiyya al-kubrā*, 4: 161−162（#328）.

[32] Ibid., 4: 165−170（#328）.

[33] Ibid., 4: 165, 167（#328）.

[34] Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī, *Naẓm al-ʿiqyān fī iʿyān al-aʿyān*, P. K. Hitti（ed.）, New York: al-Maṭbaʿa al-Sūriyya al-Amrīkiyya, 1927, 45−53（#34）.

の孫弟子となる。アスカラーニーの見解を参考に，ザハビーの主張を無理なく理解できたのは当然と言える。「党派的」であることと「拒否者」であることを分けるアスカラーニーの見解に，ザハビーとスブキーが展開した，シャーフィイー派ハディース学者としてのハーキムの評価を守る主張が，ある程度影響したと考えることもできる。

ここまで，ハーキムを「シーア派的／党派的」と批判することをめぐる言説の展開を追ってきた。以降，そうした批判がなされた理由と，その批判をめぐる言説が展開した文脈を整理していくこととする。

II. ハーキムに対する批判の理由と文脈

ハーキムが,「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を『両正伝集補遺』に正伝として収録したことで,「シーア派的」と批判されることになった直接的な理由は，この二つのハディースの内容である。先に見たとおり,「ガディールのハディース」は，預言者が直々にアリーをイスラーム教徒全体の指導者に定めたというものである。アブー・バクルやウマルについては，預言者が直々に指導権を託したというハディースは知られていないので,「ガディールのハディース」は，アリーが最も正統なイスラーム教徒の指導者であったとのシーア派の主張の根拠となり得る。アリーが神にとって最も好ましい被造物であったとする「鳥のハディース」の内容は，アスカラーニーが言うところの,「アリーをアブー・バクルとウマルよりも先に立てる」ことにつながる。

ただし，シーア派に与さないウラマーたちのなかで，この二つのハディースを伝えたのはハーキムだけではない。「ガディールのハディース」については，ナサーイー（Abū ʿAbd al-Raḥmān Aḥmad b. Shuʿayb al-Nasāʾī，915 年没）が,『両正伝集補遺』に収録されたのとほぼ同じ内容のハディースを『大スナン』[35] に収録している[36]。また,「私を保護者とした者は，アリーがその者

[35] Sunan.「慣行」を意味するアラビア語の単語，スンナ（sunna）の複数形。様々な事柄に関する預言者の諸々の慣行（スンナ）を参照する典拠として，一定以上の真正性を持つと判定されたハディースを事項別にまとめたハディース集も，しばしば「スナン」と呼ばれる。

[36] Al-Nasāʾī, *al-Sunan al-kubrā*, Ḥasan ʿAbd al-Munʿim Shalabī (ed.), 12 vols., Beirut: Muʾassasat al-Risāla, 2001, 7: 436−437（#8410, Kitāb al-khaṣāʾiṣ，Bāb qawl al-Nabī: Man kuntu waliyyahu fa ʿAlī wali-

の保護者である」という預言者の言葉を伝えるハディースは，ハーキムが伝えるものとは物語の筋書きが異なるものの，イブン・マージャ（Abū ʿAbd Allāh Muḥammad b. Māja，887 年没）とティルミズィー（Abū ʿĪsā Muḥammad b. ʿĪsā al-Tirmidhī，892 年没）の『スナン』や，イブン・ハンバルの『ムスナド』[37] などに収録されている[38]。「鳥のハディース」についても，ナサーイーの『大スナン』やティルミズィーの『スナン』などに収録されている[39]。

つまり，件の二つのハディースは，シーア派に与さないウラマーたちの間でもよく知られており，それだけに，彼らの一部に強く忌避されたと思われる。とはいえ，イブン・ハンバルや，ティルミズィーや，ナサーイーは，「ガディールのハディース」や「鳥のハディース」を自身が編纂したハディース集に収録したことによって，「シーア派的」と批判されたわけではない[40]。ハーキムだけが，それらのハディースを自著に収録したことで「シーア派的」と批判された理由は，『両正伝集補遺』という書物に，正伝として収録したことであったと考えられる。

イブン・ハンバルなども，ハディースの真正性に無頓着であったわけではない。件のハディースも，一定の真正性があると見なして自著に収録したのであろう。しかし彼らは，真正性を判定する基準を論じることはなく，高い真正性を認められたハディースの権威を強調したわけでもない。

---

yyuhu）.

[37] Musnad. アラビア語の原義は「支えられたもの」「根拠づけられたもの」。ハディース学においては，教友にまで確実にさかのぼるイスナードを持つハディースをムスナドと呼ぶ。また，複数のムスナドなハディースを，それぞれの情報源（典拠）である教友ごとにまとめたハディース集もムスナドと呼ばれる。

[38] Aḥmad b. Ḥanbal, *Musnad al-Imām Aḥmad b. Ḥanbal*, Shuʿayb al-Arnaʾūṭ and ʿĀdil Murshid（eds.）, 50 vols., Beirut: Muʾassasat al-Risāla, n.d., 2: 268−269（#961, Musnad ʿAlī b. Abī Ṭālib）, 32: 29（#19279, Musnad al-Kūfiyyīn, Ḥadīth Zayd b. Arqam）, etc.; Ibn Māja, *Sunan*, Muḥammad Fuʾād ʿAbd al-Bāqī（ed.）, 2 vols., Cairo: Dār Iḥyāʾ al-Kutub al-ʿArabiyya, n.d., 1: 45（#121, al-Muqaddima, Bāb fī faḍāʾil aṣḥāb Rasūl Allāh, Faṣl ʿAlī b. Abī Ṭālib）; al-Tirmidhī, *Sunan al-Tirmidhī: Al-Jāmiʿ al-Ṣaḥīḥ*, al-Shaykh Khalīl Maʾmūn Shīḥā（ed.）, Beirut: Dār al-Maʿrifa, 2002, 1416（#2/3713, Kitāb al-manāqib, Bāb manāqib ʿAlī b. Abī Ṭālib）.

[39] Al-Nasāʾī, *al-Sunan al-kubrā*, 7: 410（#8341, Kitāb al-khaṣāʾiṣ, Dhikr manzilat ʿAlī b. Abī Ṭālib min Allāh）; al-Tirmidhī, *Sunan al-Tirmidhī*, 1418−1419（#1/3721, Kitāb al-manāqib, Bāb manāqib ʿAlī b. Abī Ṭālib）.

[40] ザハビーは，ナサーイーを「少しシーア派的だった」と評した。その理由は，ナサーイーが，ムアーウィヤなどのアリーと敵対した人々に批判的であったためである。イブン・ハッリカーンも，同様の批判を伝えている。Ibn Khallikān, *Wafayāt al-aʿyān*, 1: 77（#29）; al-Dhahabī, *Siyar aʿlām al-nubalāʾ*, 14: 133（#67）.

それに対してハーキムは，先述のとおり，両『正伝集』の研究をとおして，正伝と認められるハディースが満たすべき諸条件を理論化し，その作業の当然の動機として正伝の権威を重視した。ブハーリーとムスリムの諸条件に照らして正伝と判定されるハディースは，預言者の教えを正しく伝えるので，イスラーム教徒はその語るところに従わなければならないというわけである[41]。このような研究を行ったハーキムが，ブハーリーとムスリムの諸条件に照らして正伝と判定したものの，両者の『正伝集』に収録されていないハディースを集めた『両正伝集補遺』に，「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を収録したことは，アリーがアブー・バクルやウマルをしのいで神に最も好ましい人間であり，預言者から直々に指名された最も正統な指導者であることを，預言者の教えとして認めるように主張していると解釈することもできる。そして，このように解釈すると，ハーキムはシーア派の主張に従うように説いていると見なされ得るのである。

このような解釈を行い得る者は，ハーキムの研究に注目してきた者である。ハーキムに対する「シーア派的」との批判を記述したのがハティーブであったのは，偶然ではない。ハティーブは，シャーフィイー派「ハディースの徒」として，ハーキムと同じ思想と学問的関心を持ち，ハーキムの著作をよく読んでいた[42]。そのハティーブの記事のイスナードに，語り手として登場するアブー・イスハーク・アルマウィー（Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Armawī，1036−37 年没）は，ニーシャープールで活躍したハディース学者で，両『正伝集』の研究に携わった[43]。ハティーブの記事を引用したサムアーニーも，シャーフィイー派「ハディースの徒」の学統に連なってい

[41] ハーキムは，真正なハディースを選別するハディース学の成果が「ハディースの法学」（fiqh al-ḥadīth）であり，法（sharīʿa）はそれに拠って立つと述べた。Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *Maʿrifat ʿulūm al-ḥadīth*, al-Sayyid Muʿaẓẓam Ḥusayn（ed.）, Beirut: al-Maktab al-Tijārī, n.d., 63.

[42] ハティーブのハディース学理論書，『十全伝承学』（*al-Kifāya fī ʿilm al-riwāya*）は，ハーキムの『ハディース学の知識』と構成，内容ともによく似ており，ハティーブがハーキムの著作を踏まえて著したと考えられる。また，ハティーブの『バグダード史』には，ハーキムからの引用が数多く見られる。Al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Taʾrīkh Baghdād*, 2: 296（#788）, 438（#960）, 8: 474−475（#4589）, 10: 147（#5298）, 11: 385（#6258）, etc.; Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim*, 158.

[43] Taqī al-Dīn Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Ṣarīfīnī, *al-Muntakhab min Kitāb al-Siyāq li-Taʾrīkh Naysābūr*, Khālid Ḥaydar（ed.）, Beirut: Dār al-Fikr, 1993, 129（#271）.

た[44]。

ハティーブとサムアーニーは，ハーキムに対する「シーア派的」との批判を伝えたが，それによってハーキムのハディース学者としての信頼性を否定したわけではない。彼ら二人にとって，ハーキムは自分たちが連なる学統の先達であり，「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を正伝としたことは問題だったとしても，ハーキムの研究の価値が損なわれるとは考えなかったのであろう[45]。彼ら二人の研究は，ハーキムに依拠するところも多く，ハーキムのハディース学者としての信頼性を否定することは，彼ら自身の学問を否定することにもなってしまう。

これに対して，イブン・ジャウズィーは，前節で見たとおり，ハーキムに対して強い批判を語った。ハーキムが正伝とした「鳥のハディース」は，実際には捏造ハディースであったと主張し，この主張に基づいて，ハーキムのハディース学者としての信頼性や学識を否定したのである。イブン・ジャウズィーが，このように強い批判を語った理由は，彼がハンバル派を支持したことと考えられる。ハンバル派とシャーフィイー派は，ともに伝承主義を掲げて「ハディースの徒」を名乗ったが，ハンバル派の方が急進的で[46]，シーア派に対してもより否定的と見なされる。したがって，イブン・ジャウズィーの強い批判は，ハンバル派の強い反シーア派感情に起因すると考えることもできる。

しかし，ハーキムに対する批判の展開の文脈を整理するためには，「ハディースの徒」としてのシャーフィイー派とハンバル派との論争に目を向け

---

[44] サムアーニーは，ハーキムに学んだバイハキー（Abū Bakr Aḥmad b. Ḥusayn al-Bayhaqī, 1066 年没）の弟子のイブン・クシャイリー（Abū l-Muẓaffar ʿAbd al-Munʿim b. Abī l-Qāsim ʿAbd al-Karīm al-Qushayrī, 1138 年没）などに学んだ。また，彼の主著である『由来』には，ハーキムからの引用が複数見られる。Al-Dhahabī, *Siyar aʿlām al-nubalāʾ*, 17: 165（#100）, 19: 624（#367）, 20: 456（#292）; al-Samʿānī, *al-Ansāb*, 2: 528（#3901）, 3: 454（#5930）, 4: 207（#7282）, 542（#8676）, 5: 515（#11159）, etc.

[45] ハーキムの弟子のハリーリー（Abū Yaʿlā al-Khlalīl b. ʿAbd Allāh al-Khalīlī, 1055 年没）は，ハーキムは「彼に投げつけられたあらゆるもの［非難］の中にあっても，海のように［偉大に］見えた。どんな非難も，彼がそのようであることを損なうことはなかった」と述べた。Al-Khalīlī, *al-Irshād fī maʿrifat ʿulamāʾ al-ḥadīth*, Muḥammad Saʿīd b. ʿUmar Idrīs（ed.）, 3 vols., Riyadh: Maktabat al-Rushd, n.d., 3: 853（#758）; Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim*, 159.

[46] ブラウンは，ハンバル派を「超スンナ派」（über-Sunnis）と呼ぶ。Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim*, 77−78, 137, 154, 159, etc.

なければならない[47]。その詳細は，稿を改めて論じる必要があるが，11・12世紀のホラーサーンやジバール（イラン西部），イラクにおいて，シャーフィイー派「ハディースの徒」とハンバル派「ハディースの徒」の間で，どちらがより正しい「ハディースの徒」であるかをめぐる論争があったことは確かである[48]。前節のザハビーからの引用において，ハーキムを「悪辣な拒否者」と批判したアブー・イスマーイール・アンサーリー（al-Khwāja Abū Ismāʿīl ʿAbd Allāh al-Harawī al-Anṣārī，1089年没）も，11世紀後半のホラーサーンで活躍したハディース学者で，ハンバル派を支持してシャーフィイー派と対立したと伝わる[49]。

こうした，シャーフィイー派とハンバル派の対立という文脈の中で，イブン・ジャウズィーは，ハーキムだけでなく，ハーキムに対する批判を記述したハティーブと，その師であったアブー・ヌアイムの3名をまとめて批判した。この3名は，シャーフィイー派「ハディースの徒」を代表する学者たちであり，ハンバル派ハディース学者であったイブン・ジャウズィーにとって，格好の批判の標的であった。その批判は，以下のとおりである。

〔アブー・ズルア・ターヒル・ブン・ムハンマド・ブン・ターヒル・マクディスィーは，彼の父［イブン・ターヒル・マクディスィー］から我々に伝えて言った：私［イブン・ターヒル・マクディスィー］は，イスマーイール・ブン・アビー・ファドル・クーミスィーが［次のように］言うのを聞いた。クーミスィーは，ハディースの賢者（ahl al-maʿrifa bi-l-ḥadīth）の一人であった。〕

ハディースの碩学たち（ḥuffāẓ）の中で，ハーキム・アブー・アブ

[47] Ibid., 137.

[48] 例えば，イスファハーンのハンバル派ウラマー名家であったマンダ家（Banū Manda）のムハンマド・イブン・マンダ（Abū ʿAbd Allāh Muḥammad b. Isḥāq b. Manda, 1005年没）が，同市のシャーフィイー派「ハディースの徒」であったアブー・ヌアイムと激しく論争し，アブー・ヌアイムがコーランの読誦を被造物と主張したとして批判したことなどが知られている。Scott C. Lucas, *Constructive Critics, Ḥadīth Literature, and the Articulation of Sunnī Islam: The Legacy of Generation of Ibn Saʿd, Ibn Maʿīn, and Ibn Ḥanbal*, Leiden and Boston: Brill, 2004, 97; Pavel Pavlovitch, “The Manda Family: A Dynasty of Isfahani Scholars,” *Arabica* 65（2018）: 648.

[49] 神学に対しても批判的で，『神学非難』という本を書いた。Al-Dhahabī, *Siyar aʿlām al-nubalāʾ*, 18: 503−518（#260）; Abū Ismāʿīl al-Harawī al-Anṣārī, *Dhamm al-kalām wa-ahlihi*, Abū Ḥābir ʿAbd Allāh b. Muḥammad b. ʿUthmān al-Anṣārī（ed.）, 5 vols., Amman: Maktabat al-Ghurabāʾ al-Athariyya, n.d.

ドゥッラーと，アブー・ヌアイム・アスバハーニーと，アブー・バクル・ハティーブの 3 名を，私は好かぬ。彼らは偏向が激しく（shiddat taʿaṣṣub），公平さに乏しい（qillat inṣāf）からである。

イスマーイールは正しいことを言った。［中略］彼は真実を言った。ハーキムは，党派心／シーア派性の明白な党派主義者／シーア派（mutashayyiʿ ẓāhir al-tashayyuʿ）であった。あとの二人は，神学者（mutakallim）たちとアシュアリー派の者たちに与していた。［後略］。[50]

上掲の記述からは，シーア派と神学を否定する，典型的なハンバル派ウラマーとしてのイブン・ジャウズィーの姿が浮かび上がるが，ここで彼が問題としているのは，ハーキムら 3 名がシーア派やアシュアリー神学派に与してどのような主張を行ったかではない。批判の要点は，シーア派やアシュアリー神学派に与したであろうハーキムら 3 名は，党派的「偏向が激しく，公平さに乏しい」ということである。

この批判は，「ハディースの徒」にとって厳しいものである。よく知られるとおり，ハディース学の中心的な課題である真正性判定において，イスナードに記録された伝達者の信頼性の検証は重要な作業であり，学識に優れ，シーア派であれアシュアリー神学派であれ，特定の党派に偏ることのない公平な人物によって伝えられたことが，ハディースの真正性を担保するとされた。逆に，党派的に偏向したと評される人物を伝達者に含むハディースは，その真正性が疑われた。党派的偏向はハディースを捏造する原因の一つとなり，ハディースを捏造した者は「嘘つき」（kadhdhāb）とおとしめられた[51]。「偏向が強く，公平さに乏しい」という批判は，ハディース伝達者／学者としての信頼性を強く否定するものなのである。

---

[50] Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam*, 16: 133–134（#3407）.

[51] ただし，ハーキムは，ハディースの捏造を非難する一方で，党派的偏向を含む捏造の原因を明確にしていない。ハティーブは，高い真正性を支える条件の一つに，党派的偏向がないことをあげたが，それが捏造の原因になるとは明確に述べていない。「ハディースの徒」のなかで，党派的偏向の危険性を明示したのは，シャフラズーリー（Abū ʿAmr ʿUthmān b. al-Ṣalāḥ al-Shahrazūrī, 1245 年没）であった。Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *Maʿrifat ʿulūm al-ḥadīth*, 103−112; al-Khaṭīb al-Baghdādī, *al-Kifāya fī ʿilm al-riwāya*, Ḥasan ʿAbd al-Munʿim Shalabī（ed.）, Damascus and Beirut: Muʾassasat al-Risāla, 2013, 26; Ibn al-Ṣalāḥ al-Shahrazūrī, *ʿUlūm al-ḥadīth*, Nūr al-Dīn ʿItr（ed.）, Damascus: Dār al-Fikr, 1984, 98−101（*An Introduction to the Science of the Ḥadīth*, Eerik Dickinson［trans.］, Reading: Garnet Publisher, 2006, 77−78）.

もちろん，イブン・ジャウズィーが，それこそ党派的偏向に駆られて，シャーフィイー派「ハディースの徒」の重鎮たちに，いわれのない批判を向けたということではない。シャーフィイー法学派の支持者がアシュアリー神学派を支持することは顕著な傾向であり，ハーキムに対する「シーア派的」との批判は，既に見たとおり，イブン・ジャウズィーより 1 世紀ほど前のバグダードで，ハティーブによって記述された。前節と本節で引用したイブン・ジャウズィーの二つの記事の双方に語り手もしくは伝達者として登場し，前節で引用したザハビーの記事にもハーキムに対する批判の語り手として登場した，イブン・ターヒル・マクディスィー（Abū l-Faḍl Muḥammad b. Ṭāhir b. al-Qaysarānī al-Shaybānī al-Maqdisī，1113 年没）は，ジバールの都市，ハマダーンで活躍したハディース学者で，師弟関係からはハンバル派と思われるが，ザーヒル派とも伝えられる[52]。ハーキムに対する「シーア派的」との批判は，11 世紀から 12 世紀に，ホラーサーン，ジバール，イラクで活躍したハディース学者たちの間で学派を超えて広まっており，イブン・ジャウズィーは，そうしたハディース学者たちの見解を踏まえ，ハディース学の理論に則って，ハーキムの「ハディースの徒」としての信頼性を否定したのである。

そして，前節のイブン・ジャウズィーの記事で注意を引かれたもう一つの点，すなわち，「ガディールのハディース」への言及がないことについても，イブン・ジャウズィーが，ハディース学の理論と動向に目を配ったためと推測される。なぜなら，「ガディールのハディース」の眼目である，預言者が直々にアリーに指導権を託したという話を捏造と断じることは，11・12 世紀のハディース学の理論や議論に照らして困難であったと考えられるからである。

「私を保護者とした者は，アリーがその者の保護者である」という預言者の言葉を伝えるハディースは，複数のハディース集に収録され，様々なイス

[52] ブラウンはイブン・ターヒルをハンバル派としているが，史料ではザーヒル派という記述が多い。Brown, *The Canonization of al-Bukhārī and Muslim*, 159; Ibn al-Dimyāṭī, *al-Mustafād min Dhayl Taʾrīkh Baghdād li-l-Ḥāfiẓ Ibn al-Najjār al-Baghdādī*, Muṣṭafā ʿAbd al-Qādir ʿAṭā (ed.), Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1997, 23–24 (#24); Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Lisān al-mīzān*, ʿAbd al-Fattāḥ Abū Ghadda (ed.), 10 vols., n.p.: Dār al-Bashāʾir al-Islāmiyya, 2002, 7: 215 (#6938); Ibn al-Jawzī, *al-Muntaẓam*, 17: 136 (#3815).

ナードが付された様々な物語で語られる。ハディース学の理論において，様々なイスナードで広く知られながら一致して伝わっていることは，真正性を支える条件の一つと見なされる。もちろん，それだけで高い真正性を認められるわけではない。それぞれのイスナードの信頼性も検討されなければならない。「ガディールのハディース」のイスナードの信頼性は，上記の預言者の言葉を伝えるハディースが，ティルミズィーとイブン・マージャの『スナン』に収録されていることによって補強される。また，上記の預言者の言葉は伝えてはいないものの，預言者がガディール・フンムで説教したというハディースは，ムスリムの『正伝集』に収録されている[53]。

周知のとおり，スンナ派は，両『正伝集』とティルミズィーやイブン・マージャの『スナン』を含む6篇のハディース集を「六書」(al-Kutub al-Sitta）と呼び，真正性の高いハディースを集めた正典（canon）的ハディース集と認める。「六書」の正典化は10世紀から12世紀にかけて進展したので[54]，イブン・ジャウズィーが活躍した12世紀後半においては，「六書」のいずれかに収録されたハディースには一定以上の真正性があると見なされるようになっていた。そのような状況のなかで，「ガディールのハディース」は，その内容を否定したかったとしても，真正性を完全に否定して，捏造と断ずることの難しいハディースになっていたと考えられる。イブン・ジャウズィーは，ハーキムへの批判を強めた際に，真正性の否定が困難な「ガディールのハディース」への言及を避け，比較的容易に真正性を否定できる「鳥のハディース」[55]に集中したと推測されるのである。さらに，『両正伝集補

[53] Muslim b. al-Ḥajjāj, *Ṣaḥīḥ Muslim*, Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 2006, 941（#36［2408］, Kitāb faḍāʾil al-ṣaḥāba, Bāb min faḍāʾil ʿAlī b. Abī Ṭālib）(『日訳サヒーフ・ムスリム』磯崎定基他［訳］, 全3巻，日本ムスリム協会，1987−89，第3巻，401−403).

[54] Stijn Aerts, “Canon and Canonization of Ḥadīth,” in *The Encyclopaedia of Islam Three*, Kate Fleet et al.（eds.）, Leiden and Boston: Brill, 2007−，Online version: https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-3/canon-and-canonisation-of-hadith-COM_27570?s.num=1&s.f.s2_parent=s.f.cluster.Encyclopaedia+of+Islam&s.q=canon+and+canonization（2022年9月12日閲覧）.

[55]「六書」のなかで「鳥のハディース」を収録するのは，ティルミズィーの『スナン』のみである。しかも，ティルミズィーは，このハディースを真正性の比較的低い「特異なもの」(gharīb）に分類し，イスナードの信頼性に議論があることも示唆している。ブハーリーは，「鳥のハディース」のイスナードには，教友世代の伝達者と後続者世代の伝達者の間に断絶がある可能性を指摘する。ナサーイーの『大スナン』に収録された「鳥のハディース」の別伝では，預言者が神にとって最も好ましい者を来させるように神に祈願したところ，最初にアブー・バクルが来て帰され，次にウマルが来て帰され，その次に来たアリーが通されたとなっている。これは，「アリーをア

遺』に収録された「ガディールのハディース」のイスナードにイブン・ハンバルが含まれ，イブン・ハンバルの『ムスナド』にも，「私を保護者とした者は…」という預言者の言葉を伝えるハディースが収録されていることも，イブン・ジャウズィーに「ガディールのハディース」への言及を避けさせたのかもしれない。

いずれにしても，イブン・ジャウズィーは，「ハディースの徒」の正統をめぐるハンバル派とシャーフィイー派の論争という文脈のなかで，シャーフィイー派「ハディースの徒」の重鎮であったハーキムを厳しく批判した。しかしその批判は，学派間の対立をむき出しにしたものであってはならず，ハディース学の理論と動向を踏まえた学術的なものでなければならなかった。ハディース学者間の論争という文脈のなかで記述された批判は，その読者としてハディース学者たちを想定し，彼らを説得し，彼らの同意を得ることを意図したものであったはずだからである。少なくとも，党派的な中傷と簡単に反論されるものであってはならず，ハディース学の理論や動向を踏まえた学術的検証に基づく，「公平」な批判と見なされるようなものでなければならなかったのである。

そうした学術的に「公平」な装いのなかで，ハーキムに対する批判の重心は，彼がシーア派の主張を支持したという疑惑から，党派的偏向ゆえに信頼できないという，ハディース学者としての否定的評価に移った。イブン・ターヒルやイブン・ジャウズィーが用いた「シーイー」や「ムタシャイイウ」（mutashayyiʿ）といった言葉では，「シーア派的」という意味よりも「党派的」という意味が前面に出ているように読める。ザハビーは，こうした批判の重心の移動を突いて，ハーキムは「拒否者（rāfiḍī）ではなく，党派的（shīʿī）なだけだ」と弁護したとも言えるだろう。

ブー・バクルとウマルよりも先に立てる」と見なされる内容である。なお，ナサーイーの『大スナン』は「六書」に含まれない。「六書」に含まれるのは，彼の『小スナン』（*al-Sunan al-Ṣughrā*）である。Al-Bukhārī, *al-Taʾrīkh al-kabīr*, 8 vols., n.p.: Dār al-Fikr, 1986, 2: 2−3（#1488）; al-Nasāʾī, *al-Sunan al-kubrā*, 7: 410（#8341, Kitāb al-khaṣāʾiṣ, Dhikr manzilat ʿAlī b. Abī Ṭālib min Allāh）; al-Tirmidhī, *Sunan al-Tirmidhī*, 1418−1419（#1/3721, Kitāb al-manāqib, Bāb manāqib ʿAlī b. Abī Ṭālib）.

おわりに

10 世紀後半から 11 世紀前半にかけて，シャーフィイー派「ハディースの徒」を代表するハディース学者として活躍したハーキムは，「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」を『両正伝集補遺』に収録した。このことによって彼が「シーア派的」と批判されたことからは，「正統四カリフ」の序列というスンナ派の基本的教理の一つが，11 世紀前半には既に浸透していたことが確認される[56]。スンナ派の本流を自認した「ハディースの徒」にとって[57]，アリー崇敬は，アブー・バクルやウマルへの尊崇に優越してはならなかったのである。逆に，それに反しない限り，アリーを崇敬し，アリーに預言者の近親として特別な地位を認めることは問題とされなかった。例えばハーキムは，アリーを預言者に系譜において最も近しい者の一人と述べたが[58]，それによって「シーア派的」などと批判されたとは伝えられていない。預言者一族としてのアリー家についても同様であり，『両正伝集補遺』は「使徒の家の一族の美徳」として，例えば以下のハディースを収録する。そのことでハーキムが「シーア派的」と批判された形跡も認められない。

〔［前略］ウンム・サラマが言った。〕

私［ウンム・サラマ］の家において，「神はただ，この家の一族（ahl al-bayt）よ，お前たちから穢れを取り去ろうと望んでいるのである」［コーラン 33 章 33 節］［という啓示］が下った。すると神の使徒は，アリーとファーティマとハサンとフサインに使いを出し，「これらが我が家の一族」（hāʾulāʾi ahl baytī）と言った。[59]

---

[56] アブー・ヌアイムは，『指導権の書』のなかで，預言者の後，指導権に最も相応しかったのはアブー・バクル，ウマル，ウスマーン，アリーの順であるとするのが，「共同体の民の教説であり，ハディース伝達者たちとウンマの大勢からの慣例」と述べた。Abū Nuʿaym al-Aṣbahānī, *Kitāb al-imāma wa-l-radd ʿalā al-Rāfiḍa*, ʿAlī b. Muḥammad b. Nāṣir al-Faqīhī (ed.), Medina: Maktabat al-ʿUlūm wa-l-Ḥikam, 2001, 206.

[57] ハティーブは，預言者のスンナを相続したのが「ハディースの徒」であると述べた。al-Khaṭīb al-Baghdādī, *Sharaf aṣḥāb al-ḥadīth*, Mehmed Saîd Hatîboğlu (ed.), Ankara: Ankara Üniversitesi Basımevi, 1972, 45−46.

[58] Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *Maʿrifat ʿulūm al-ḥadīth*, 171.

[59] Al-Ḥākim al-Naysābūrī, *al-Mustadrak ʿalā al-Ṣaḥīḥayn*, 3: 146（Kitāb maʿrifat al-ṣaḥāba, wa min manāqib ahl bayt Rasūl Allāh）. ルーカスは，ハーキムが，こうしたハディースによって「預言者一

こうした，アリーと彼の家族の預言者一族としての美徳を無難に語るハディースに比べて,「ガディールのハディース」と「鳥のハディース」は，アリーをアブー・バクルやウマルよりも上位に置くと捉えられる内容を持つ。ハーキムの同僚やその学統に連なる 11 世紀のシャーフィイー派「ハディースの徒」は，スンナ派の教理に反しかねない二つのハディースをイスラーム教徒が従うべき正伝としたことについて，ハーキムを「シーア派的」と批判した。個別のハディースの真正性判定に寄せられたこの限定的批判は，12 世紀にかけて,「ハディースの徒」の正統をめぐってシャーフィイー派と対抗関係にあったハンバル派のハディース学者たちによって，シャーフィイー派「ハディースの徒」の重鎮であったハーキムのハディース学者としての学識と信頼性に対する総体的批判として語られるようになった。ハンバル派ハディース学者のイブン・ジャウズィーは，ハディース学の理論と動向を踏まえつつ，シーア派による捏造が疑われる「鳥のハディース」を正伝としたことは，ハーキムが「［アリーの］党派」に傾倒したことを示し，そうした「党派的」偏向が強く公平さに乏しい人物は，ハディース学者として信頼できないと主張したのである。

ハンバル派の批判に対して，シャーフィイー派「ハディースの徒」の学統を引き，14 世紀に活躍したザハビーとスブキーは，アリーを過度に愛することと，アリーをアブー・バクルやウマルに優先させて後二者を「拒否する者」（シーア派信徒）であることを分けた。そして，ハーキムはアリーを過度に愛するところがあったが，シーア派信徒ではなかったので，偉大な「ハディースの徒」としての学識と信頼性が損なわれることはないと弁護した。

こうした批判と弁護の展開からは，スンナ派におけるアリー崇敬が，広く実践されながら,「シーア派的」との批判を惹起する危険性をはらんだ，緊張感をともなうものであったことが改めて浮き彫りになる。そしてまた,「シーイー」や「ムタシャイイウ」という言葉によって意図される批判の重心が，シーア派の主張につながるところがある「シーア派的」な人物だということと,「党派的」で不公平なので信頼できない人物だということの間を

族」（Ahl al-Bayt）をアリーとファーティマの家族に限定したと述べるが，このハディースは，アリー家以外の預言者の親族を「預言者一族」から排除しているとは読めない。Lucas, “Al-Ḥākim al-Naysābūrī and the Companions of the Prophet,” 239.

移動していたことも観察された。

ザハビーによるハーキムの弁護が，ハンバル派によるハーキムに対する批判の重心が「党派的」であることに置かれたことを利用したものと考えられることは既に述べた。これに加えて，ザハビーによる弁護は，シーア派との断絶を強調するものでもある。スンナ派がシーア派への対抗によって形成された側面を持つ以上，スンナ派のウラマーにとって,「シーア派的」との批判はもとより重い。しかし，11 世紀のハティーブの記事に見られる限定的批判からは，アリーを過度に愛する「シーア派的」傾向があっても，立派な「ハディースの徒」であり得るという認識がうかがえる。同時に，アリーへの過度な愛がシーア派と共通する要素であることも否定しない。

それに対して，アリーを過度に愛する「党派的」傾向を持つ人物と，アブー・バクルやウマルを「拒否する者」を分けて，ハーキムは前者であっても後者ではなかったと断じたザハビーによる弁護は，ハーキムのシーア派性を全面的に否定するだけでなく，アリー崇敬をシーア派から引き離す。ハーキムのアリーへの過度な愛が,「拒否者」と呼ばれるシーア派信徒と共有される要素であったことは無視されるのである。

アリー崇敬とシーア派との分離は，スブキーの記事により顕著である。スブキーは，ハーキムが「ハディース学者」(muḥaddith) であったので，シーア派信徒ではないと断言する。なぜなら,「ハディース学者」であることとシーア派信徒であることは，ほとんど相容れないからだという[60]。本質的にシーア派性を帯びることのないのが「ハディース学者」であり,「ハディース学者」であったハーキムがアリーを熱愛し「鳥のハディース」を正伝としたとしても，それはシーア派と関わるものではあり得ない。なぜなら，ハーキムは「ハディース学者」であったのだから，というわけである。これは循環論であるが,「ハディースの徒」／「ハディース学者」にとっては,「シーア派的」との批判を退け，幅広いアリー崇敬を容認する強力な主張となったとも推察される。

ハーキムに対する「シーア派的／党派的」との批判をめぐって,「ハディースの徒」を称したスンナ派伝承主義者が 11 世紀から 14 世紀にかけて断続的に続けた議論からは，彼らのアリー崇敬に対する認識が，スンナ派の教理と

[60] Al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfiʿiyya al-kubrā*, 4: 161−162 (#328).

の緊張関係と学派間論争のなかで構築され，シーア派との連続と断絶という問題とも連関していたことが明らかになった。今後，アリー崇敬に関する「ハディースの徒」の議論を幅広く検証していくことは，スンナ派におけるアリーと預言者一族に対する崇敬の歴史を考察することに資するだけでなく，シーア派とスンナ派の相互認識の多面性や，透過性をともなう曖昧さと交流を遮断する峻厳さとの間を揺れ動く宗派間境界に対する理解を深めることにもつながると期待される。